

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320007

研究課題名（和文） 経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築

研究課題名（英文） Construction of a new global standard for the business ethics

研究代表者

杉田 正樹（SUGITA MASAKI）

関東学院大学・人間環境学部・教授

研究者番号：70130937

研究成果の概要（和文）： 明治以降、今日にいたる日本の起業家たち、具体的には、渋澤栄一、大原孫三郎、武藤山治、波多野鶴吉、から、現代の稲盛和夫（京セラ）、中村俊郎（中村ブレイス）、大山健太郎（アイリスオーヤマ）、小倉昌男（ヤマト運輸）、大山康夫（日本理科学工業）などについて、インタビューなどを含めて、かれらの公益志向を作り出した、気概、精神、背景にある倫理想を明らかにした。これは、伝統思想である、儒教や神道、仏教に解消できない、独自の思想であることがあきらかとなった。

研究成果の概要（英文）：We investigate the ethical thought as a background for the Japanese entrepreneurs from Meiji era to today as follows: Shibusawa Eiichi, Magosaburo Ohara, Sanji Muto, Tsurukichi Hatano, Inamori Kazuo(Kyocera), Toshiro Nakamura(Nakamura Brace), Kentaro Oyama (Iris Ohyama), Masao Ogura(Yamato transport co.,Ltd), Yasuo Oyama (Nihon rikagaku Industry co.,Ltd). It has particular characteristics beyond so to say the synthesis of traditional ethics such as Confucianism, Shinto, and Buddhism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2009年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2010年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総計	14,000,000	4,200,000	18,200,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：(1)企業倫理 (2)起業精神 (3)信頼 (4)教育 (5)伝統 (6)儒教 (7)公益 (8)労働

1. 研究開始当初の背景

金融を初めとする経済活動のグローバル化が様々な問題を引き起こし、予想を超えて深刻な金融危機が生じた。

その構造的不況の結果でもあり、また一因でもあるのが、非正規雇用の拡大とその安易な減首であることはいまや常識とな

っている。個々の企業は自己防衛として減首するのであるが、その結果、全体としてみれば、失業増加、消費減少、企業の業績悪化、減首、失業のスパイラルが生じている。

特に日本はデフレを克服できないままに、特に若年者に過酷な犠牲を強いること

となった。政治の劣化がそれに拍車をかけた。

また、始まりつつあるアメリカの世界史からの退場や、ヨーロッパのユーロ圏の危機的状況も、不安を一層掻き立てている。

国内を見れば、政治家、官僚、マスコミ、経営者、（そして教育も入れておこう）の劣化・腐敗が著しく、世界の動きに対応できないのではないかと、という不安が国民を覆っている。（東北大震災と福島原発事故への対応を見れば、ますますその感を深くする。）その最大の犠牲者が、弱者、とりわけ若年層であることも深刻である。

しかし、と言うべきか、当の若年者たちが、ほとんど社会的無気力状態に置かれ、自分たちの身に何が起きているのか、判断できない状況である。

2. 研究の目的

当初、われわれはグローバル化がもたらした問題を整理し、その根源に迫って経済倫理の観点から新たな基準を作ることを目論んだ。

しかし、現実には予想をはるかに超えて進み、今日の危機的状況が出現した。というのは、われわれは、東アジアの知的・倫理的遺産を再確認し、ついで、福祉を重視する市民社会的伝統を有するヨーロッパと手を組み、グローバル化したアメリカ型資本主義と対決する、という構想を抱いていたのだが、対決する前に、グローバル化した金融資本が生き残りをかけて暴走し、肝心のアメリカは、産業の空洞化によって、軍事以外に頼るものがない国へと転落した。

ヨーロッパも、現状を維持できるかどうかさえ危ぶまれる状況になったことは、先に述べたとおりである。

我々としても、目を国内に向けて、まさに目の前に起きていることを、その根底にさかのぼって明らかにし、対応することが重要だと考えるに至った。

そこで登場したのが、明治期から今日まで、日本の経済や社会を作り出すに営々と力した先人たち、とりわけ経済界において奮闘した起業家群像である。

彼らは、今日よりも過酷な状況で、私利をほとんど考慮せず、社会の公益を最優先して活躍した。こうした明治以降今日に至る起業家たちを支えた思想や価値観を明らかにすること、これを研究の目的としたのである。

これは、当初もっていた、東アジアの知的・倫理的遺産を再確認する、という目論みに戻ったことを意味する。

これによって、われわれは、教育を通して、問題の由来を根底から分析する視野と、

それを克服する方途を自ら考える思考力と気概を若年者にもたせることができるからである。

3. 研究の方法

中間報告で明らかにしたように、我々はフランスやドイツの研究者と「労働と倫理」というテーマで研究発表を行い、それぞれが抱えている問題とその背景を明らかにしようと試みた。

たとえば海外に進出した企業が現地でも当面する文化的、倫理的問題とそれへの対応について具体的に論じたり、日本の民間思想である「武士道」や石門心学や二宮尊徳の思想などの現代的意義を明らかにしたり、現代の大規模な技術がもつ倫理的意味について意見を交換したりしたのであった。

比較文化的アプローチと言えようか。

また、後半では、明治以降における起業家の気概、精神、背景にある倫理思想を明らかにするために、具体的には、渋澤栄一、大原孫三郎、武藤山治、波多野鶴吉、から、現代の稲盛和夫（京セラ）、中村俊郎（中村ブレイス）、大山健太郎（アイリスオーヤマ）、小倉昌男（ヤマト運輸）、大山康夫（日本理科学工業）などについて、インタビューなどを含めて、調査をおこなった。

文化史的、経済史的アプローチと言えるであろう。

4. 研究成果

成果は、「最終報告書」にまとめておいた。

また、2008年11月に、フランスの「アルザス欧州日本研究所」において、2日間にわたって「仕事の倫理」をテーマに、シンポジウムを行った。これについては「中間報告書」で成果を公表しておいた。

この報告書には、ドイツのデュッセルドルフで行った、「労働と倫理」に関するワークショップの成果も掲載している。

また、これらはホームページでも公表している。

これらについてももう少し詳しく以下に述べることにする。

(1) フランスの研究者との議論において浮かびあがったのは、たとえば「倫理」と「道徳」、「文明」と「文化」、「レイバー」と「ワーク」をどのように理解しているか、といういわば根本的な問題であった。

また、海外に進出した企業が現地でも当面する問題は、結局、自国の文化をどのように理解しているか、という問題であった。

さらに、たとえば武士道や石門心学や尊徳といった民間の思想や、松下幸之助の通俗道徳や経営観がもっている、国内における影響力

について、外国ではほとんど理解がない、といった認識のギャップの問題である。

当然のことながら、日本の企業の行動様式やメンタリティを理解するためには、ドロッカーだけでは不十分であることは自明であり、また、そうした背景への理解を欠いてビジネスは成り立たないという、ごく当然のことを改めて認識したのであった。

(2)「最終報告」では、明治期から今日に至る期間に、公益を優先し、創意工夫を行い、気概をもった、起業家、企業家についての報告をした。ここで取り上げたのは10数名に過ぎない。

問題は、こうした人物たちが、具体的に何を考え、何をしたのか、ということであり、そこから学ぶべき点を明らかにすることであった。特殊な人の特殊な行為であるとすれば、われわれは知ることはできても、生かすのは難しい。しかし、彼らがそうした偉業を成し遂げたのは、むしろ彼ら個人の資質や環境もあるだろうが、それを可能にした文化的背景や、それを認め評価する多くの理解者がいたからであろう。

もし、今日、そういう企業（起業）家が少なくなっているとすれば、気概のある偉大な人物を輩出するための、文化的資本が機能不全に陥っているか、ないしは、疲弊しているからとは考えられないであろうか。そうだとすれば、機能不全や疲弊の原因は何か、ということが問題となる。その原因を、われわれは、価値観の一元化、単純化にあるのではないか、というのが我々の結論である。

しかし、価値観の一元化に抗して、新しい、別の価値観を作り出すのは困難なことである。ましてやそれを広めることはさらに困難である。それよりも、現在の価値観の問題点とその帰結を示しつつ、同時に、かつてあったが、今日忘れられている価値観を思い出すことの方が、よほど実現可能性が大きいのではないか。

実をいえば、これはハイデガーが採った戦略であるが、孔子もイエスも、同様である。かつてあった価値あるものが、今日忘却されている、というのである。硬直し、現実に関わなくなった宗教を改革するとき、始祖に帰ることを主張するのも同じ戦略である。われわれもまた、今回それを採ることにするのは、それが合理的であり、実現可能性が高いからである。もっとも、それは比較の問題であって、容易でないことは言うまでもない。

今日の価値観の一元化が問題だと述べたが、それは、経済主導の価値観の一元化、もっとあけすけに言えば、拝金主義一元論が問題であることは、恐らく間違いあるまい。とすれば、かつてあった、それに反する価値観を想起し、その意義を再確認することは、現

状打破の第一歩ということができるであろう。

これを如何に行うか。我々は、文献資料から演繹するのではなく、上に述べたように、実際の企業家や企業家のエトスを、その実践から帰納する方法である。

我々は実際、そうした手法によって、10数名の調査を行なった。そして、彼らの背後には歴史的・文化的・社会的蓄積と価値観が働いていることを確認したのであった。それは、個人の特殊性、個別性に解消できないものであり、いくなれば民族的、文化的遺伝子とも言えるようなものであった。

以上が、研究成果の要約である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

- ① 杉田正樹、大原孫三郎を生んだもの、科研費研究プロジェクト「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」(基盤研究(B))「最終報告書」、査読無、2012、5-11
- ② 杉田正樹、東日本大震災と人間環境論(2)、関東学院大学人間環境学部、人間環境学会紀要、査読無、17号、2012、19-34
- ③ 加藤尚武、洪澤栄一と経済の倫理、科研費研究プロジェクト「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」(基盤研究(B))「最終報告書」、査読無、2012、12-14
- ④ 篠澤和久、企業内起業のための企業理念と経営観、科研費研究プロジェクト「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」(基盤研究(B))「最終報告書」、査読無、2012、29-41
- ⑤ 篠澤和久、論理教育における「論理」とは?、情報リテラシー研究叢書、査読有、創刊号、2012、84-100
- ⑥ 香川知晶、民はいかに官と闘うか——ヤマト運輸、小倉昌男の経営学——、科研費研究プロジェクト「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」(基盤研究(B))「最終報告書」、査読無、2012、25-28
- ⑦ 萱野孝彦、京セラ 稲盛和夫について、科研費研究プロジェクト「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」(基盤研究(B))「最終報告書」、査読無、2012、48-53
- ⑧ 沖田行司、がんこの教育と経営理念、科研費研究プロジェクト「経済倫理の新たな

なグローバル・スタンダードの構築」(基盤研究(B)「最終報告書」、査読無、2012、15-20

- ⑨ 九鬼一人、目的合理主義者と非帰結主義者、科研費研究プロジェクト「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」(基盤研究(B)「最終報告書」、査読無、2012、62-74
- ⑩ 杉田正樹、東日本大震災と人間環境論(1)、関東学院大学人間環境学部、人間環境学会紀要、査読無、16号、2011、1-16
- ⑪ 直江清隆、技術者倫理から技術の倫理へ—事例分析から、技術倫理と社会、査読無、6巻、2011、1-11
- ⑫ 直江清隆、中小企業だからこそできる障害者雇用、科研費研究プロジェクト「経済倫理の新たなグローバル・スタンダードの構築」(基盤研究(B)「最終報告書」、査読無、2011、42-47
- ⑬ 小山巖也・谷口勇仁、企業におけるソーシャルイシューの認識—雪印はなぜ2回目の不祥事を防げなかったのか—、日本経営学会誌、査読有、26号、2011、15-26

[学会発表] (計1件)

- ① 小山巖也、Characteristics of Japanese-style Business Ethics Practices、Society for Business Ethics、2011年8月14日、米国・サンアントニオ

[図書] (計6件)

- ① 加藤尚武編著、芙蓉書房、人間と貢献心、2012、297
- ② 加藤尚武編著、芙蓉書房、科学文化と貢献心、2012、381
- ③ 小山巖也、白桃書房、CSRのマネジメント、2011、163
- ④ 香川知晶、有斐閣、『はじめて出会う生命倫理』(玉井真理子・大谷いづみ編)、「第13章 人間はどこまで機械なのか脳神経倫理」(277-291頁)、2011、321
- ⑤ 香川知晶、岩波書店、『「いのちの思想」を掘り起こす 生命倫理の再生に向けて』(安藤泰至編)、「第五章 生命倫理研究の開拓者たち—成熟あるいはその拒否—」(193-237頁)、2011、243
- ⑥ 小山巖也(村田和彦編著)、中央経済社、企業活動と市民生活、2010、31-48

[その他]

ホームページ等

<http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~be02/in>

[dex.htm](#)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉田正樹 (SUGITA MASAKI)
関東学院大学・人間環境学部・教授
研究者番号：70130937

(2) 研究分担者

竹内整一 (TAKEUCHI SEIICHI)
鎌倉女子大学・教育学部・教授
研究者番号：80107515

加藤尚武 (KATOU HISATAKE)
鳥取環境大学・大学院環境情報学研究科・客員教授
研究者番号：10011305

沖田行司 (OKITA YUKUZI)
同志社大学・社会学部・教授
研究者番号：20131287

香川知晶 (KAGAWA CHIAKI)
山梨大学・大学院医学工学総合研究部・教授
研究者番号：70224342

篠澤和久 (SHINOZAWA KAZUHISA)
東北大学・大学院情報科学研究科・准教授
研究者番号：20211956

直江清隆 (NAOE KIYOTAKA)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：30312169

菅野孝彦 (KANNO TAKAHIKO)
東海大学・総合教育センター・教授
研究者番号：50221908

小山巖也 (KOYAMA YOSHINARI)
関東学院大学・経済学部・教授
研究者番号：60288347

加藤泰史 (KATOU YASUSHI)
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：90183780

井上厚史 (INOUE ATUSHI)

島根県立大学・総合政策部・教授
研究者番号：90259565

田中智彦 (TANAKA TOMOHIKO)
東京医科歯科大学・教養部・准教授
研究者番号：30288039

(3) 研究協力者

九鬼一人 (KUKI KAZUTO)
岡山商科大学・法学部・教授
研究者番号：30299169